

純国産「さくら玉子」の話 前編

下に、本紙No.421(昨年7月)の記事を再録しました。その冒頭・・・

“毎週お届けしている玉子の親たちは、じつはデカルブ社というヒナ会社の製品です。同社は、これまで世界最大の穀物メジャーであるカーギル社の傘下でしたが、このごろドイツのほうに売却されたそうです”

という情報には、じつは続きがありました。この外国産の親鶏を日本に輸入している商社は、かつては日本人がオーナーだったのが、すでに引退しちゃって、その資本は中国人の金持ちの手に渡っているそうです。

いまは日本向けに輸入販売の業務をしているけど、これから中国国内で卵の消費量と購買力が高まれば、はるかに市場としては大きいの

で、いつでもそちらに振り向ける可能性はあるわけで、そのとき日本の卵事情はどんなことになるのか・・・

というような実態はマスコミでは報じられないし、だから考えたことのある人もいないと思うので、参考までにお知らせしておきます。

*

で、ここからが今週号の本題。

まず大雑把にまとめてみると・・・

日本人は平均して毎日1人1個



の卵を食べています。マヨネーズなどの加工食品には輸入品も使われているようだけど、基本的には卵は国内産です。1日に1億個が消費・生産されていることになります。

鶏は、毎日1個ずつ卵を産みます。ということは、日本には卵を産むための鶏(採卵鶏)が、約1億羽飼養されているわけです。

ふつうの鶏は1年くらい卵を産んで働くと、後は廃鶏として処分されます。その分を補充するために、新しいヒナを毎年1億羽ずつ供給する体制が必要になります。

で、そのうち国内産の親(種鶏)から生まれるのは6%、つまり600万羽しかないというのが下記記事の意味するところですよ。

そして、その純国産のヒナを生産・出荷しているヒナ会社は、たった一社。岐阜県にある「後藤孵卵場」というところですよ。・・・あらら、紙面がつきちゃった。(つづく)

← 白い雌鶏の説明も次号に

卵 ← 採卵鶏 ← 種鶏 ← 原種鶏 ← 原々種鶏

毎週お届けしている玉子の親たちは、じつはデカルブ社というヒナ会社の製品です。同社は、これまで世界最大の穀物メジャーであるカーギル社の傘下でしたが、さきごろドイツのほうに売却されたそうです。

というような話を、先日、全国自然養鶏会の関東ブロック交流会に飛び入りで参加させてもらって聞いてきました。さらに・・・

鶏は、肉を生産するものをブロイラー、卵を生産する鳥をレイヤー(採卵鶏)とって、まったく別の種類です。どちらも、それぞれの分野で最高の能力を発揮するよう、交雑種として産まれてきます。

だから、食べている卵が有精卵だったとして、それを温めてヒナをかえしても、同じような産卵能力をもった鶏にはなりません。

で、その採卵鶏を産んだ親鶏は「種鶏」と呼ばれます。食べている卵からみれば祖父母にあたります。もちろん♂と♀がいるわけですが、これまた、どちらも交雑種です。

♀として利用する系統と、♂として利用する系統では必要な能力がちがうので、それぞれの両親の組み合わせも別になって、4系統を維持しなければならぬわけです。この、種鶏の親

にあたる世代を「原種鶏」といいます。

さらに原種鶏の親たちは「原々種鶏」と呼ばれ、だいたいアメリカかオランダなどで維持されています。

と、そこまでさかのぼるまでもなく、原種鶏や種鶏といったレベルです。じつは輸入されたものがほとんどです。

卵は「物の優等生」なんて呼ばれて、国内で自給していると思われています。が、その飼料のほとんどが輸入であり、さらに鶏たちも海外に頼っているのが実態というわけです。なんと採卵鶏の国内自給率は6%でいじかないそうです。